



記録はアンカーの関谷に託された。不安だからではなく、信じているから声が出る

第1泳者の松田花(3年) スタート直後から体半分抜け出す

第2泳者の蒔田理陽(2年) 唯一の2年生は度胸満点

第3泳者の川島美憂(3年) チームの盛り上げ役

保護者たちも歓喜の涙

アンカーの関谷彩花(3年) 個人種目でも県を制した実力派

大会記録を更新したことが場内アナウンスされた瞬間、喜びを爆発させるメンバーたち

学校対抗戦で初優勝 [Close Up]

邑楽中学校水泳部女子の軌跡

5年ぶり 26年ぶり フリーリレーでは「県大会記録更新×全国出場」

第69回群馬県中学校水泳競技大会は7月28～30日、前橋市「県立敷島公園水泳場」で行われ、邑楽中学校水泳部女子が学校対抗戦で初優勝した。さらに、4×100mフリーリレーで同部リレーチーム(松田花、蒔田理陽、川島美憂、関谷彩花)が4分10秒16で優勝。予選ではそれまでの大会記録を0秒42上回る4分08秒05の新記録を樹立。全国標準記録も突破し、全国大会への出場を決めた。4×100mフリーリレーでの全国大会出場は実に26年ぶりの快挙となった。

★学校対抗戦★
6人の団結力で初優勝

学校対抗戦は、各レース種目の上位8位までに点数が与えられ、その総得点で争われる。部員は6人。その全員がそれぞれの勝負種目にエントリー。個々が力いっぱい泳ぎ、レースに出ている仲間に声援を送った。まさに団結力を発揮しての初優勝だった(結果は右ページ)。

★4×100mフリーリレー★
“0秒24”を追いかけて

話は7月1日の県春季選抜大会にさかのぼる。この大会を4分11秒03で優勝。「それまで目標だった全国大会(以下、全中)出場が現実味を帯びてきた瞬間でした」と振り返るキャプテンの松田。全中に出場するためには県夏季大会で全国標準記録の4分10秒79を突破する必要があった

からだ。このとき、その差は0秒24。「わずか」ともとれるが、勝負の世界に絶対はない。とりわけ、リレー競技ならではの難しさもある。

リレー競技は、4人が順番に泳ぐ。個人の競技力はもちろん、泳ぐ順番や引き継ぎのスタート練習など、何度も何度も繰り返し準備する必要がある。タイミングが早過ぎれば失格、遅ければタイムロスになってしまうからだ。メンバーは県夏季大会までの4週間、部活動やスイミングスクールで練習を重ねた。

“4分08秒05”県新記録と全中切符

そうして迎えた県夏季大会。「絶対に全中へ行こう」と、4人で手を取り合って向かった予選のレースで5年ぶりの記録更新を達成する。

第1泳者は、後半でも疲れを見せない泳ぎが特徴の松田。「スタートで失格しないようにしなきゃ……」との不安もよぎったが、思い切った飛び込みで、スタート直後からトップに立つ。期待通りの粘り強い泳ぎでトップのまま第2泳者の蒔田へ。

「トップで来るとは思っていたけど、先輩たちの足を引っ張っちゃいけない! って涙が出るほど緊張して……」と蒔田。それでも度胸満点の2年生は「先輩たちと全中に行くんだ」という高いモチベーションで、しっかり「つなぎ役」を果たす。

第3泳者の川島は勝負の要となった。水泳を始めたのは4人の中で最も遅いが、スクロールの速さはチーム1。「アンカーのあや(関谷)が勢いよく、思い切って飛び込めるように、良いテンポでタッチするように気を付けた」と話した通り、それまでの

リードをさらに広げてアンカーの関谷につないだ。

関谷は「前の3人が頑張ってくれて順位の勝負はついてたけど、全国標準記録が掛かっていたので私も必死に泳いだ」と話した。

リレーでつなぐのは、みんなの心

会心のレース展開での記録更新&全中出場権獲得に、顧問の久保田裕

先生は「ほぼ期待通りにやってくれた。4人が役割を全うして頑張ってくれた結果。控えのメンバーも徹底してサポートに努めてくれた。みんなの心がつながっていた。リレーはすごくエキサイティング」と興奮した表情でレースを振り返った。

同じメンバーで臨んだ決勝のレースでは、予選タイムを下回ったものの、2位と8秒差をつけて優勝した。

★県夏季大会の学校対抗戦で初優勝を収めた邑楽中学校水泳部女子の記録★

種目	順位	選手名(○数字は学年)	記録	上位大会
50m自由形	1	関谷彩花③	27秒81	—
100m自由形	1	関谷彩花③	1分00秒64	—
100m自由形	8	川島美憂③	1分03秒59	—
100m背泳ぎ	7	金子瑞歩②	1分10秒60	関東大会
200m背泳ぎ	2	松田花③	2分24秒67	—
200m背泳ぎ	6	金子瑞歩②	2分28秒77	関東大会
200mバタフライ	3	小倉涼花③	2分29秒95	関東大会
200m個人メドレー	4	松田花③	2分30秒30	—
4×100mメドレーリレー	4	松田花③、川島美憂③、小倉涼花③、関谷彩花③	4分51秒17	—
4×100mフリーリレー	1	松田花③、蒔田理陽②、川島美憂③、関谷彩花③	4分10秒16 (予選4分08秒05)	全国大会



「何となく、かっこ良かったから」と選んで付けた背番号「21」の大野七海選手。侍ジャパンと呼ばれる野球日本代表のユニフォームを身にまとい、世界に挑戦しました。

JAPAN

取材協力・写真提供/全日本女子野球連盟

[Close Up]

女子野球日本代表として「第1回BFA女子野球アジアカップ」に出場

チームの絶対的エースが、無失点で優勝に貢献



最終合宿中にリラックスした表情を見せる大野選手

9月2日から7日まで香港で開催された「第1回BFA女子野球アジアカップ」。日本は初戦の韓国戦で11対0と快勝し勢いに乗ると、チャイニーズ・タイペイに6対1、パキスタンに17対0。そして地元・香港との接戦を2対0、最終戦のインドにも17対0で勝利し、5戦全勝で優勝しました。

初代チャンピオンになった女子野球日本代表。しかし、日本の女子野球はすでに世界の強豪として君臨している、2年に一度開催されるワールドカップも現在5連覇中。今回新設のアジアカップもフル代表による国際試合でしたが、日本は若い世代に国際経験を積ませようと高校生のみでチームを編成していました。このメンバーの一人が邑楽町(谷中蛭沼・11区)出身の大野七海選手です。

大野選手は右投げ右打ちで威力ある速球を武器にする投手。高島小3年生の時に兄さんの影響で野球を始め、中学時代はボーイズリーグで硬式野球をしていました。その後、京都府の福知山成美高校に野球留学。2年生の時、練習中に左膝前十字靭帯を断裂し、8か月のリハビリを経て復帰。今年春と夏の高校女子野球全国大会とともにベスト4。チームのエースとして活躍していました。

日本代表合宿で調整を行う最中の8月25日には町役場を表敬訪問。「日本代表として、もちろん、邑楽町代表として、しっかり自分の役割を果たして優勝したい」と話していました。

大会で大野選手は2試合に登板。合計7人の打者に對して、被安打1、四死球0、奪三振3、自責点0の成績でした。特に大会前から「一番の強敵」とされていた第2戦のチャイニーズ・タイペイ戦では、1点ビハインドの6回から登板。その後チームが逆転し、最終回をしっかりと締めて、大野選手が勝利投手となりました。第3戦のパキスタン戦では代打で出場。レフト前ヒットを放つなど打者としても活躍しました。

9月9日、日本代表としての日程を終えて帰国した大野選手にお話を聞きました。

谷中蛭沼(11区)出身 大野七海 選手

26年ぶりの出場 全国中学校水泳競技大会 in鹿児島県鹿児島市「鴨池公園水泳プール」8月17~19日

一人じゃないんだ、と思った夏

県夏季大会で全国標準記録を突破し、出場権を得ていた4×100mフリーリレーに邑楽中学校水泳部女子が出場した。目標の「決勝進出」はならなかったが、全国の舞台を体いっぱい楽しんだ。

2020年かごしま国体水泳競技の会場になる鴨池公園水泳プールは、桜島の美しい稜線をモチーフにした切妻屋根が特徴で、国際基準を満たしたプール。場内にはテンポの良いBGMが流れ、選手の気持ちを高揚させる。満席の客席からは、わが子の活躍を一目見ようと全国から集まった保護者たちも声援を送っていた。

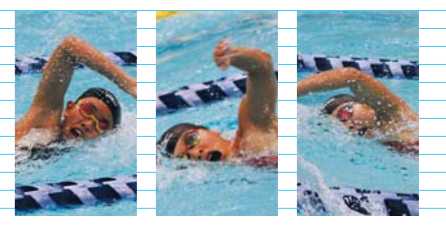
レース後、「ベストタイムじゃなかった」「決勝に残りたかった」と口ぐちにする選手たち。しかし言葉とは対照的に、その表情は重圧から解放された穏やかなものだった。

この夏、数々の記録を残した邑楽中学校水泳部女子。それはもちろん6人の努力の賜物だ。だが、保護者や指導者、チームメイトなどたくさんの応援を受けて達成できた記録でもある。

「全中に出場できたのは、一緒に泳いだ先輩、どんなときでも支えてくれた家族やコーチ、応援してくれた友達や近所のかたがた……。たくさんの支えがあったからです」。新キャプテンになった蒔田の言葉からそれが分かる。

絆をかみしめて、2017の夏

一見、個人スポーツと思われる水泳にもチームワークの大切さ、一つの目



標に向かうことの大切さを改めて感じることができた。水泳の楽しさもレースの緊張感も一緒に味わってくれる仲間がいた。選手たちは決して、一人ではなかった。仲間との絆をかみしめて選手たちの夏は幕を閉じた。

←全国大会と関東大会に出場する女子部員へ送られた、うちわ。邑楽中学校水泳部の男子部員が気持ちを込めて作り、送ったものだ。

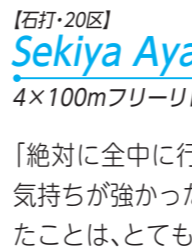
邑楽中学校水泳部女子の軌跡★選手インタビュー



【下中野・1区】
Matsuda Hana

4×100mフリーリレーで全国大会出場

全中出場の目標を達成できて、うれしいです。全中のタイムは悪かったけれど…、良い結果は出せなかったけれど、泳いでいる最中がとても楽しかったです。



【石打・20区】
Sekiya Ayaka

4×100mフリーリレーで全国大会出場

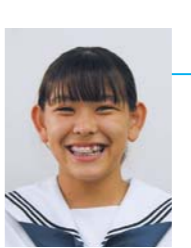
「絶対に全中に行きたい」という気持ちが強かったから、全中で泳げたことは、とても良い経験になりました。今年の夏はすっごくあつという間でした。



【前瀬戸宿・8区】
Makita Rion

4×100mフリーリレーで全国大会出場

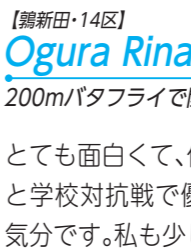
先輩たちがいなくなるけど、上位大会に出場できるようにこれからも一生懸命頑張ります。一緒に水泳を頑張れる仲間がたくさん入部してほしいです。



【鶴上・12区】
Kawashima Miu

4×100mフリーリレーで全国大会出場

全中でチームのベストタイムが出せず、悔いは残ります。でも、全中出場の目標が果たせたことと、県記録を歴史に残せたことが、とてもうれしいです。



【鶴新田・14区】
Ogura Rina

200mバタフライで関東大会出場

とても面白くて、仲良しなメンバーと学校対抗戦で優勝できて最高の気分です。私も少しは貢献できたかな(笑)。卒業しても水泳を続けたいと思っています。



【新中野・33区】
Kaneko Mizuho

100m & 200m背泳ぎで関東大会出場

関東大会は会場の盛り上がりすぎて、驚きました。来シーズンの目標は県大会で表彰台に上がること。そして上位の大会に出場できるように頑張ります。



21 世界で戦えた経験を 女子野球の普及に役立てたい 女子野球日本代表 大野七海 PITCHER Ohno Nanami

——優勝おめでとうございませす。初代チャンピオンです。大野 ありがとうございます。優勝はチームとして掲げた絶対的な目標でした。そのチームの一員になれて心からうれしいです。

——ちょっとミナーな質問します。日本代表ともなるとサインの練習とかするんですか？大野 サインで盗塁とか、バントとかのですか？（…少し考えて…）あ、そっちのサインですか？ないです、ないです。でも、頼まれて書いたのが4、5枚ありましたけど。

——何て書いたんですか？大野 「大野七海、21」って。それ以外書くことないですよ（笑）

——邑楽町から応援していた人もたくさんいたと思います。大野 はい。広報おうらや新聞に載ってからは、中学の同級生や先生などから連絡をもらいました。あと、小学生時代から動向が届きました。小学生たちが大きな声でエールを送ってくれて（照）。香港到着直後で少し緊張していたと見えたので、小学生たちのエールに和まされました。とてもうれしかったです。

——登板した試合について聞かせてください。所属する福知山成美高校では、先発完投型のピッチャーとして活躍していた印象があります。しかし、日本代表で登板した2試合では「抑え」としての起用でした。やりによくなくなかったですか。

とを考えて行動していると思うようになりました。国内外の女子野球の環境づくりと普及です。そのためにもより高いレベルで野球をすることにこだわりたいです。

——つまり今後も女子野球日本代表を目指す？大野 はい。今回は高校生だけのチームでした。もちろん自信にもなりました。でも、プロや大学、

大野 それは全く。前日に橘田監督（女子野球日本代表監督）からあらかじめ「抑えていく」と言われていました。短いイニングなので最初から飛ばしていきまじつた。絶対に点をやらない、って気持ちもいつも以上に乗っていましたね。最初の登板は2戦目のチャイニーズ・タイペイ戦でしたが、やばかったです。

——「やばかった」？大野 マウンドが上がったのが6回表。1対0で負けている状況でした。このとき改めて日の丸を背負っている重みみたいなものを感じました。

——6回表を抑え、その裏逆転。7回も0点で抑えて勝利投手に。大野 高校の試合でも緊張することはありません。だけど比じゃないです。でも楽しめたんです。たぶん、アドっていたんでしょうね。

——「アドっていた」？大野 アドレナリンが体中を回って。程よい緊張感で集中力も高まって、いつもより良いパフォーマンスができたんだと思います。

——大会前、神奈川県川崎市で行われた最終合宿で橘田監督に大野選手のことを聞くと、「インコースの真っ直ぐで勝負できる唯一の選手。信頼しています」と話していましたよ。

大野 えっ！初めて聞きました。——3奪三振はインコースで？大野 いや、アウトコースでした（笑）。橘田監督は国際経験も豊かなかたで、特に海外で試合をする心得などを教わりました。それに伝えたことは？

社会人クラブなど国内には高いレベルで野球をしている女性がいま。こういった人たちと戦って、勝って、フル代表のメンバーに選ばれることを目指します。

——そんな大野選手。女子野球選手として小中学生の「目標」や「夢」、「憧れ」にもなると言います。町内で野球をしている小中学生に伝えたいことは？

と、「これからの世界の女子野球は日本に掛かっている」「世界の見本になる野球をしよう」と私たちに語りかけ続けてくださいました。

——パキスタンやインドの選手たちと一緒に練習することもあったそうですね。

大野 ウォーミングアップやフリーダウ、トスバッティングを一緒にやりました。とにかく楽しんでやっていました。試合中は一球一球、1アウトごとの盛り上がり方もすごいんです。

——具体的には？大野 例えば1点取ったとき。それはもう優勝したかのような喜びようです。踊るんです。ベンチの前で、野球ができることへの喜びで溢れていました。

——逆に教えられた？大野 そうですね。日本では野球ができる環境が当たり前のようにあります。でも、パキスタンやインドのような野球発展途上国では、日本のような指導を受ける機会も、道具も、グラウンドもありません。そんな環境の中でも、体いっぱい心から野球を楽しむ姿を見て、改めて野球のすばらしさを感じましたし、共感できました。そういう意味でも国際試合を経験できたことはとても大きいです。

——次の目標もありますよね。大野 中学時代からプロ野球選手になることが夢でした。この夢は変わりません。でも、今回の経験を通して、自分のことだけじゃなくて、今まで以上に女子野球のこ

大野 パキスタンやインドの選手たちのように野球を純粹に楽しむ姿勢っていうのは、振り返ってみると、私は少年野球時代に教わった気がします。だから、……えーと……とにかく、野球を楽しんでください（笑）。私も楽しみです。

大野 パキスタンやインドの選手たちのように野球を純粹に楽しむ姿勢っていうのは、振り返ってみると、私は少年野球時代に教わった気がします。だから、……えーと……とにかく、野球を楽しんでください（笑）。私も楽しみです。